

ボク、サッカーの選手になるんだ！

——ウガンダのキナルワさんにインタビュー——

編集部

アフリカの中では豊かな国といわれるウガンダから遠く離れ、日本に生活を始めて、通算七年になるモゼス・キナルワさん。外交官として来日、現在は貿易会社スタートの準備に忙しい毎日です。奥さまとは、外交官時代、友人の紹介で知り合い結婚。お二人のかわいなお子さんにも恵まれ、はりあいのある毎日を通していらっやいます。週末はアフリカサッカーチームのプレーヤーとして活躍するスポーツマン。そんなキナルワさんに子供時代のことやお子さまの教育について伺いました。

——子どもの頃どんな所に住んでいらっしやったんですか。

キナルワ——すごくいなかね。牧場とか農園とかやってる家だからね。うちは。

——遊び場は、たくさんあったわけですね。

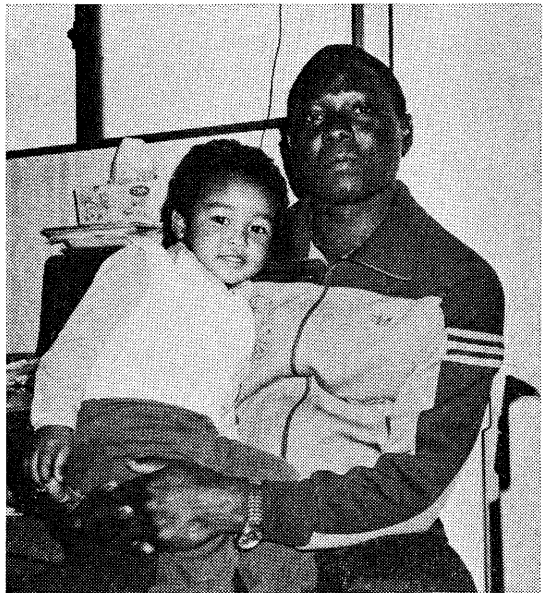
キナルワ——そうね。広がったから、よくサッカーして遊んだよ。サッカー大好きです。

——お友だちも近くに住んでましたんですか。

キナルワ——友だちもいたけど、親類とか近くにいっぱいいるよ。ワタシ、十一人兄弟で、四人お姉さん、六番目から十番目まで男で、ワタシが長男、十一番目は妹ね。だからみんなで遊べる。サッカーもね。

——お母さん大変だったでしょうね。子供育てるのに……。

キナルワ——うん。でも親類もみんな一緒に住んでるから、自分の子とか他人の子とか区別しないで、まとめてめんどうみるんですよ。だからすごい大家族ね。子供も家の手伝いたくさんします。ワタシもよくやったよ。



——学校は近くにあったんですか。

キナルワ——うん。わりと近くね。五キロぐらいかなあ。そんなにかけられないよ歩いて。

——え／＼五キロも、歩くんですか。(思わず驚きの声を上げてしまった)

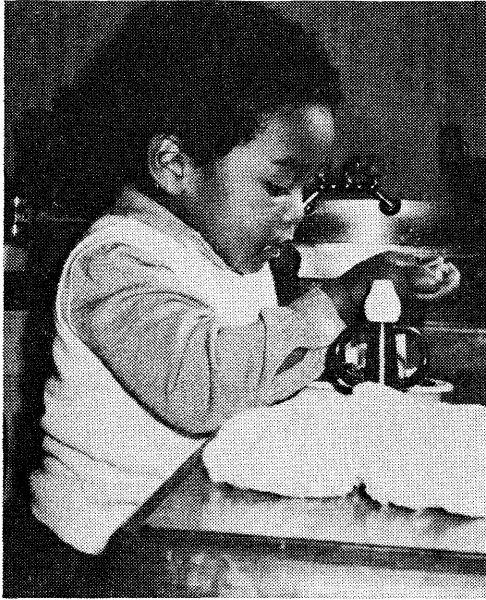
キナルワ——友だち十六キロぐらいの子ざらね。ワタシ

たち歩くの速いですよ。

(長い足のキナルワさんならと納得する。)

——子供の頃、すぐおこられたことってありませんか。

キナルワ——そうね。ううん。友だちとサッカーやってそれに夢中になって、牛を山につれて行って草食べさせるの忘れたね。そしたら、お父さんにうんとおこられ



た。ぶつねお父さん。棒で、たくさん。:

——体罰ですね。私も子供の頃、よくたたかれたり、押入れに入れられたりしました。この頃は親が、人前で子供をたたくの見たことないですね。

キナルワ——日本の親、ちっとも子供に厳しくないと思うね。日本の子供わがままね。

自分のやりたいことを無理にでも通そうとする。他の人のことあまり考えてないよ。わがままなのと、ノビノビ育つていうのは別のことだと思えますよ。英語教えててそう思うね。親はもっと厳しくてもいい。口で言ってもわからない時は、やっぱり体でわからせなくちゃいけないね。よくおこられました。ワタシ。

——お父さんこわかったですか。

キナルワ——やさしいよ。でもおこるとこわいね。でもね。大きくなったら何も言わないよ。成人すると男の子は別の所に住まなくちゃいけないです。親の所に遊びに来ても、決して泊ってはダメね。大人になったらいつでも親と一緒にいるのをおかしいことです。

——へえ。子どもと大人との区切りがはっきりしている
んですね。日本だと、いつまでも親と同居したりするで
しょう。だから大きくなって子どもは子どもの役割り
をになってしまみたいです。ピーターパンではいられ
ないんですね。ウガンダでは…。

キナルワ——おかしいよ。大人なんだから。結婚して家
族で住むのはOKね。でも若い大人の男の人は、別に住
まなくちゃいけない。

——キナルワさんが日本に行くと言った時、ご両親は、ビ
ックリなさいませんでしたか。

キナルワ——そうでもない。日本って、自動車、電気製
品なんかでよく知ってる国。ワタシ自身、自動車とか好
きだし、日本行ってみたかったね。お父さんもお母さん
も、あまり心配してなかったみたいね、ワタシ大人だか
ら。

——ご結婚なさる時、何かご両親はおっしゃいましたか。
キナルワ——別に。子どもがハッピーならいいね。弟も
三人日本にいる。すぐ下の弟は、やっぱり日本人の奥さ

んね。その下も、日本人のガールフレンドいる。好きな
人と結婚するのは当然ね。

——結婚のことで、ここで奥さまにも伺ってみました
すが。国際結婚っていうことで大変な面もありますでし
ょうね。



奥さん——でも、私は別に彼が外人だからって結婚したわけじゃなくて、たまたま私の好きになった人がウガンダの人だったんです。そうは言っても私の家は、鳥取のいなかですから、反対もされました。でも好きになったんだから、それを大切にしたいわけです。彼と知り合ってから、一時は、すごく反対されてとても結婚できそうもないというので別れて、家にもどったんですけど、たまたま上京した時、偶然連絡があつて、それでまた会うようになって、彼がイランに赴任する時、私も追いかけて行って結婚したんです。

——わあ！。何かドラマを聞いているみたいです。

奥さん——え、そんなことはありません。ごく自然の成り行きですから。親も初めは反対してましたけれど、孫も生まれたし、今はよく上京して遊んでいきます。かわいくてたまらないみたいです。

——お子さんの教育は、どのようになさるおつもりですか。

奥さん——まだ、上の子が二才で、下のが七ヶ月ですか。



ら、あまりよくわかりませんが……。とにかく遊び相手を手を、今はたくさん見つけてやりたいと思います。保育園には、申し込んでいるんですが、うちの近所には、あまり子どもがいなくて、たまにいても、正太しょうたはやはり他の子とちょっとふんいきが違いますから、子どももちょっとどきつとするんですね。まあ馴れてしまえばそこは

子どもですから、楽しく遊びますけれど…。ですから、

今は遊び相手が親としては最大の悩みですね。

——二才と七ヶ月にしては、お二人ともすごくしっかりなさっていますね。

奥さん——ええ、大きいんです。とても体ががっちりして、だから将来はスポーツマンにしたいと思うんですけれど…。

(二才の正太くんは、ものすごくヤンチャで言葉もしっかりしてとても二才児とは思えないほど。七ヶ月のあやちゃんも足がしっかりして、すぐにも歩き出しそうだ。お父さんのキナルワさんの運動神経の良さを、しっかり

受け継いでいるのだろう。)

——学校は近くに行くんですか。

奥さん——今、考えている最中で、まだわからないんですけど…。私は今の子ども達みたいにも勉強だけの生活をさせたくないもので、できればのびのびと育ててほしいと思っています。まあ、勉強よりも、スポーツでがんばってほしいです。だから、日本の学校はどうかかなあと思ってます。幼稚園だけは、近くに行かせるつもりですけれど、小学校は、インターナショナルスクールに通わせようかと思っています。まあこれからが大変でしょうね。

インタビュウを終えて……。

インタビュウの間中、正太くんは、一時もじっとしてなんかいない。エネルギーがいっぱいの彼は、好奇心あふれる大きな瞳を輝やかせては、私に話しかけたり、大好きなプロ

ックを床にバラまいたり、元気いっぱいだった。カメラ好きの彼は、私がカメラを構える
と飛んで来て、レンズに目を近づけ、のぞき込む。そのため、何度も写真がとれる位置ま

で、彼を下がらせなければならなかった。久しぶりに子どもらしい子どもに会ったと思つた。今回は、キナルワさんのお宅でインタビュウさせて頂いたが、正太くんにはどこか室外で会いたかった。太陽がサンサンと降り注ぐ、広々とした野原でも、彼に会えたならもつともつとすてきな笑顔が撮れたに違いないし、そして、キラキラした大きな瞳の彼のバックには、台所じゃなくて、緑の野原が一番似合う気がする。七ヶ月のあやちゃんは、ほっぺが今にも落ちそうな大きな女の子。お母さんのおっとりした性格をうけたのか、彼女もとてもおっとりしている。奥さまのおもてなしのせいか、初めて伺つたおうちで、私は二時間もおしゃべりをして過ごした。なにか大変くつろがせて頂いた。

夕方近く、キナルワさんは、「これから英語の家庭教師に行く。」と言って、奥さまの手造りの弁当をショルダーバックにつめた。「がんですけど、この人についてゆけば安心と思つています。」と奥さまがおっしゃるだけのことはあつて、キナルワさんの背中が、がっちりとして大きかった。渋谷方面に行くといふので、「では私も一緒に。」と言う、キナルワさんは「ワタシ、歩くのすごく速いですから、あなたはゆっくり来て下さい。」と、同行を拒否された。毎日5キロの学校への道のりを走つたキナルワさんの長い足と、私の日本的な短かい足では、とてもかなうわけはなく、私は、あっさりあきらめて、もう一ぱいお茶を頂いてから帰ることにした。